

## 宮古圏域の「著書・論考」をたずねて(補遺)

## 前編

仲宗根 将二

## はじめに

本稿の前編をなす「宮古圏域の『著書・論考』をたずねて」は、二〇二二年三月、本誌(「宮古島市総合博物館紀要」)二十六号に掲載している。一九九〇年代以降、宮古郷土史研究会の「会報」や地元紙誌等に寄稿した小論の中から大まかに六十一編を選びだし、一部「歴史と民俗」十九編、二部「文芸と芸能」十一編、三部「組織の動向」十五編、四部「人・・・」十六編に分類しての公表であった。

多少とも宮古全般を概観するという観点で選びだしたせいか、その後の資料整理をとおして宮古関係者の著書・論考が改めて紹介するほどに一定量出てきたのは予期していなかっただけに驚くとともに、それならばそれで矢張り一つにまとめておくことが関係者はもとより、今後の宮古の表現活動を理解する一助にもなればと思考して、改めて整理し公表することにした。前編に準じて五十二編を次のように四部に分類してある。

一部	歴史と民俗	十四項
二部	文芸と芸能	十三項
三部	組織の動向	十三項
四部	人・・・	十二項

時期的には一部一九九〇年代もあるが、大方は二〇〇〇年代以降、

現在までを整理してある。発表当初の内容に即した表題はすべて省略し、著者と書名のみを改めて収録したのは前編と同様である。

## 第一部 歴史と民俗

## 1. 沖縄県歴史教育者協議会宮古支部

## 「宮古の歴史と文化を歩く」東アジアの中の宮古

九州の南から南西へおよそ一千km、弧状に連なる島々は、古くは「南島」、近年は南西諸島、琉球弧とも呼ばれている。その先史時代は九州以北の本土文化圏を相対化し得るほどに地域性豊かな文化を展開しており、「南島文化圏」と称されている。さらに地域的特性から大きく三つに区分され、種子島・屋久島を中心とする北部圏、奄美・沖縄諸島を中部圏、宮古・八重山の南部圏である。北部圏は縄文・弥生時代を通じて九州文化とほぼ同様の文化、中部圏は九州文化の影響を受けつつも、縄文後期頃からは地域性のある文化を展開しているのに対し、南部圏は縄文・弥生文化の影響を受けることなく、南方色濃厚な文化を展開していたとみなされている。

このため南部圏は、中・北部圏と同様の時代区分は困難視され、仮に「先島編年」を用いている。大きく前期・後期の二期に区分され、前期はおよそ四〇〇〇〜二五〇〇年前、後期は二五〇〇〜十一世紀ごろまでと見なされるが、宮古の後期は今のところ下限は二世紀ごろまでである。前期は土器を用いているのに、後期は土器が消

えて、貝斧と焼石調理に特色が見られる。この逆転現象には二つの見方がある。一つは、土器に換わる新たな道具が登場したとする、文化一元論、今一つは、土器を持った人びとが何らかの理由で出て行った後に、土器を持たない人びとが入ってきた、文化二元論の考えである。

有視界航海の困難な中部圏と南部圏を隔てているおよそ三百kmの大海（宮古凹地）を乗り越えて、両者が交流を深め、「琉球文化圏」を形成していくのは、十一世紀ごろからとみなされる。大陸で宋が建国されて、東支那海に多くの「海商」が登場し、島々とも交易を始める。琉球王国成立の前夜、「グスク時代」と呼ばれている。

宮古・八重山が公的に沖繩本島の王権と交渉を持ったのは十四世紀末とみなされている。浦添・首里を中心とする中山、今帰仁を中心とする北山、糸満を中心とする南山の、三大鼎立時代である。一三九〇（洪武二十三）年、宮古の与那覇勢頭豊見親が中山の察度王権に入貢し、朝貢関係が始まった。一四二九（宣徳四）年、中山の尚巴志が北山、ついで南山を攻略して琉球王国が生まれる。

一五〇〇（弘治十三）年、八重山のオヤケアカハチらの事件にさいして、琉球王府は兵を差し向け制圧したが、宮古の仲宗根豊見親は宮古勢を率いて王府軍の先導役をつとめた。その功で仲宗根豊見親は宮古での地位をいっそう強固なものにするとともに、八重山への影響力も強めた。また妻宇津免嘉は祭祀の最高位である大安母に任命された。こうして仲宗根夫妻は琉球王権を背景に、祭政両面から支配者としての地位をいっそう強固なものにした。税制を中心に諸制度をととのえ、水源や道路の整備、架橋、御嶽等の整備に当たっている。

一六〇九（慶長十四）年、薩摩藩は江戸幕府の同意を得て兵三千

で琉球王国を制圧した。奄美諸島は直轄領として薩摩藩に割譲され、対中国（明↓清）との冊封貿易は事実上薩摩藩の管掌するところとなった。こうして琉球王国は形の上では独立王国であったが、実態は薩摩藩を介して幕藩体制下におかれた。研究者のなかには「日本の中の異国」と呼ぶ状況が、江戸時代を通じて二百数十年もつづいた。

この時期、宮古・八重山は、数え十五〜五十歳の男女を納税義務者とする人頭税社会であった。男性は主として穀物（宮古は粟、八重山は米）、女性は織物を貢租として琉球王府と薩摩藩に納付した。一八六八年、明治維新によって江戸幕府を倒し、近代統一国家として成立した明治政府は、一八七二（明治五）年、「琉球処分」に着手した。那覇からの帰途、台湾に漂着した宮古住民らが虐殺されたことへの報復措置としての西郷従道らの日本初の海外派兵―台湾出兵などをへて、一八七九（明治十二）年四月、廃藩置県は断行された。沖繩県の誕生である。しかし、初期県政は「旧慣温存期」とよばれるような旧制度を踏襲しての出発であった。一八九三（明治二十六）〜九五五年、宮古農民の「島政改革・人頭税廃止」国会請願運動や謝花昇らの自由民権運動、外にあっては日清戦争など、激動する内外情勢を反映して、ようやく「旧慣改革」―他府県同様の制度に改められていった。

同時に「御真影」と「教育勅語」等による「皇民教育」は全県を通じて徹底された。「富国強兵」と「殖産興業」を二大國是とする明治国家の基本政策に基づく教育方針の貫徹である。徴兵令も全面適用された。一九三一（昭和六）年「満州事変」に始まる十五年「アジア太平洋戦争」では、この小離島宮古の出来事が教科書に登場するなど、国民の戦意高揚に利用されている。明治初期ドイツ商船の

遭難救助にもとづく「博愛美談」は日独軍事同盟へ、日露戦争のさい小舟で八重山電信局まで「敵艦見ゆ」の電報を運んだ「久松五勇士」などである。大戦末期の一九四三(昭和十八)年九月以降、宮古には三つの軍用飛行場が設営され、全域軍事基地化されて、三万余の陸海軍将兵が展開した。直接戦闘に役立たない老幼婦女子およそ八千人は台湾や九州に強制疎開させられ、残った働き手のほとんどは中学生・女学生まで現地召集・徴用で軍事基地設営・戦闘訓練に明け暮れた。「沖繩戦」では、沖繩本島と異なり地上戦こそなかったものの、米・英軍の連日の猛爆で、野良仕事はできず、平良の街はもとより集落のほとんどは灰燼に帰している。海空の輸送路を絶たれて武器・弾薬はおろか食料や医薬品の補給もなく、民も兵も飢えと風土病マラリアのため多くの命が失われた。「補充兵われも飢えつつ餓死兵の骸焼きし宮古しまよ八月は地獄」「犬、猫、鳥、みな喰いつくし熱帯魚に極限の命つなぎたる島」「餓死兵を夜毎井桁に重ね焼く我に一粒の涙なかりき」(千葉真在任・高澤義人)と、うたわれるほどの惨状を呈していた。

一九四五(昭和二十)年八月十五日、「ポツダム宣言」の受諾で日本は敗戦。宮古の各学校は同月三十一日「御真影」や「勅語」等を焼却して「皇民教育」―軍国主義・超国家主義教育に別れを告げ、十二月八日、米軍政下におかれた。人びとはこうして衣・食・住はじめすべてに事欠くなかで、「新宮古」の建設をめざして戦後を出発している。

八つの有人島からなる宮古は、総面積二二四・六平方km、全県のおよそ十分の一。最も高い所でも海拔百十三メートル、全体百メートル以下の平坦な隆起珊瑚礁の島々である。表土浅く、地表を流れる川も発達していない。台風や干魃に悩まされつつも、豊かな海流

と季節風、温暖な気候に恵まれ、南北文化の接点として地域性豊かな文化をはぐくんできた。各地に九百余の御嶽はじめ、多くの遺跡が点在している。毒蛇ハブも生息せず、秋には人里近くまでアカハラダカやサシバ等の渡り鳥が飛来する島々である。

(宮古の歴史と文化を歩く)二〇〇六・六・二三)

## 2. 宮国 猛 『宮古の体育・スポーツ史年表』

巻頭の「宮古の体育・スポーツ史年表発行にあたって」で、同様テーマで先行する、小禄恵良『栄光の系譜』『宮古体育スポーツ百年の歩み』、仲宗根玄惇『宮古体育・スポーツ史』の功績をたたえている。その上で、体育・スポーツにかかわってきた先輩方から「宮古の過去における体育・スポーツを可能な限り、出来るだけ広い分野に亘って明らかにするため」の聞き取りにさいして、記憶をよみがえらせ、「より高い効果を期待」するためにまとめたことを明記している。

先行する小禄、仲宗根両氏の成果にも学びつつ、『宮古教育誌』(宮古連合区教育委員会)、『平良市史』(平良市教育委員会)、それに各種新聞報道等を活用している。第一部「体育・スポーツ関係編」で、明治以来の体育・スポーツ史年表、宮古関係にしばった那覇マラソン、全琉高校駅伝、六市町村体育協会の設立など、第二部「資料編」では、全日本トライアスロン宮古島大会、泰久マラソン大会、宮古体育協会の活動、スポーツアイランド宮古構想(私案)、宮古観光振興の一考として、ナショナルトレーニングセンターの宮古建設を期待する、運動会の移り変わりについてなど、各種資料とともに、体育・スポーツを宮古振興に活かす方策についても提起する内容になっている。そのほか、著者の競技記録、三十枚の表彰状・感謝状

一覽、親交關係を示す一二六人の名刺等が掲示されている。一九九  
九・一二・二九刊、B五判、三八二頁、私家版。

(「宮古郷土史研究会会報」一一七号、二〇〇〇・三・十七)

### 3. 大田義弘著

『方言から考える 西原(宮古・池間系)方言

とその古代性とルーツ』

著者の大田氏は平良・西原出身、一九二七年生れ。沖縄県師範学  
校を戦争で中退、国学院大学文学部を出て、小学校教員、英文紙編  
集、米フランクリン財団シンク・タンク日本支所長等をへて、現在  
川崎市在住の「民族言語学研究者」。昨年十二月宮古で開かれた第二  
十九回南島史学会にも出席、「南島のユークイ(世乞い)について」  
と題して発表している。

池間島を祖とする西原方言を「記・紀・万葉などに、見える上代  
語と比較」しつつ、逆に池間島方言系の源郷・原流をさぐり、「未詳  
上代語の解説にも役立つ」ていることを強調している。「これまでの  
方言研究成果から我が池間族は北から南下した種族である可能性が  
高く、最近発表されているDNA遺伝子解析結果もこのことを支  
持しているようです」(まえがき)と、伊波普猷以来の日本人南進説  
を展開している。

全体の構成は、一、西原方言と池間族、二、日本の古代が生きて  
いる我が西原方言、三、文体・語彙・仮名遣いとも古形の西原方言、  
四、南島方言から解説するアマ、アメ、クニ、クマヒトなどの未詳  
上代語、と各面から具体的に例証している。結論として「六、結び」  
では、南進説をより具体的に「南下したというより」「数的にも圧倒  
的多数であった弥生系渡来人に押し出されたためであった」と推測

している。そのうえで、「池間族を含む先住倭族」は、「九州中・南  
部と紀伊半島中・南部」からの南進ではなかったろうか、とその渡  
来以前の先住地まで考察している。それでも「わが方言の比較言語  
学的手法による根本的解明、それに基づく池間族の原郷の比定、の  
視点から言えば、まだ先は長いのです」(あとがき)と記している。  
二〇〇一・一・二八刊、A五判、二四九頁、一三〇〇円＋税、新報  
出版。

(「宮古郷土史研究会会報」一二三号、二〇〇一・三・八)

### 4. 砂川栄喜『きらめく生命 宮古諸島の野鳥』

巻頭をかざる「リュウキュウキンバトの子育て」は、一九九七年  
六月二十四日「交尾」の瞬間である。一九九九年五月二十七日、リュ  
ウキュウマツの大木の下に密生する常緑広葉樹の「ゆりかごの中で」  
産みおとされた二個の卵、抱卵開始後二週間で孵化、「新たな生命の  
誕生」、孵化後十一日〜十四日ヒナは「広い世界へ巣立っていく」と  
つづけている。「巣立ち後も二、三日は巣の近くに止どまり、親鳥に  
引かれながら次第に行動範囲を広げていく」という。日を追っての  
観察記録と二十三枚のカラー写真が、読者を国の天然記念物リュウ  
キュウキンバトの世界へさそいこむ。このあと、「島の住民たち」「夏  
の訪問者」「秋から春の訪問者」「珍客」「声にならない叫び」の順で  
まとめられている。

「島の住民たち」では、川らしい川もなく、全体およそ百メート  
ル以下の平坦な宮古は「開発」が容易であり、森林面積は一六パー  
セントまで減少している。それでも確認されている野鳥は二八〇種、  
ほとんど渡り鳥で、留鳥は一〇パーセントにみたくないという。カル  
ガモ、カイツブリ、リュウキュウヨシゴイ、ガン、オオクイナ、ヒ

クイナ、シロハラクイナ、ミフウズラ、リュウキウウコノハズク、アオバズク、カラスバト、ズアカアオバト、セツカ、キビタキ：…など二〇種、三五五種。「夏の訪問者」は、コアジサシ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、マミジロアジサシ、オオアジサシ、ツバメチドリ、アカシヨウビン、サンコウチョウ、シロチドリなど九種、三三三三三三。「秋から春の訪問者」は、カワウ、ウミウ、マガモ、シロアジ、オナガガモ、ユリカモメ、ハジロクロハラアジサシ、ゴイサギ、ミゾゴイ、ササゴイ、アカガシラサギ、アマサギ、ヨシゴイ、ダイサギ、アオサギ、ムラサキサギ、タゲリ、トウネン、サルハマシギ、エリマキシギ、サシバ：…など五六種、六九種。「珍客」は、宮古では思いがけず出合う珍鳥、迷鳥である。バライロムクドリ、カンムリイヅブリ、ハイイロペリカン、コウライアイサ、コウノトリ、タシロウ：…など二六種、五一点。「声にならない叫び」では、テグスなど心ない人間の不法投棄で、片足を失ったオグロシギやキョウジョシギの痛々しい姿が三点紹介されている。

六月三日よる、クール会館で宮古野鳥の会主催で出版記念祝賀会が催され久貝勝盛氏らが祝辞を述べ賑わった。A五判、一一一頁、一八〇〇円、ニライ社、五・一五刊。

〔宮古郷土史研究会会報〕一二五号、二〇〇一・七・十二

## 5. 池村好雄『砂川古今記』

一九八〇年、池村好雄氏が数多くある城辺町砂川の「各お嶽の神々を系統的に明らかにして敬神思想の啓蒙に役立」て、併せて「近年の主なる事件等を併記し、忘れ去られようとしている今日、後裔」のためにまとめた記録を、城辺町教育委員会が「城辺町史資料」4、として刊行した。

内容は、砂川古今記、砂川上比屋の三月祭、砂川の屋号、砂川の御嶽、砂川の年中行事、仲間座御嶽の扁額、以上六編で構成されている。砂川古今記は、ほとんど伝承にもとづくものだが、一部『宮古史伝』等も引用している。上比屋系図、高間座系図、古代民、砂川村の起源、砂川村、佐阿根とうまの按司離別する。うまの按司、小真良波按司と親しくなる。高間座始祖、宮戸御嶽の由来追記、屋号について、喜佐真按司の最後、うまの按司の最後、小真良波按司の最後、按司の予言、砂川大殿の造船、阿武娥麻・恋娥麻、鬼虎征伐、阿武娥麻・恋娥麻の最後、明和の大津波、砂川の二大氏、邑の移転、流刑事件、砂川神社設立、友利・砂川騒擾事件、花切の遺恨、友利の怒り、城辺町有地の推移、一区二区に分離す、神社改築、人头税、玉石の由来など、いずれも短文ながら多岐にわたっている。

砂川上比屋の三月祭は、三月麦ブーズ、四月粟ブーズ、八月お願、三月初西の日の「ナーパイ」についてまとめている。津波除けの祭祀であるナーパイで神女らによつてうたわれるユナウスピヤーン、ナーパイのニリー、金殿のニリーも収録されている。砂川の屋号は一班二三件、二班二五件、三班一六件、四班二六件、五班二九件、六班二九件、七班三三件、八班二九件と、悉皆調査によるのである。う、本家・分家の区別もされている。著者の池村氏は一九四六〜四八年宮古郡会議員、五四〜五八年城辺町長を一期つとめている。B五判、七六頁、非売品、二〇〇一・三刊。

## 6. 城辺町教育委員会『加治道部落沿革史』

砂川恵辰氏がまとめた一九二八（昭和三）年以降の「沿革史」（加治道部落）を中心に、「加治道分字の思い出」（上地恵昌）、町史編さん事務局が調査した「加治道の屋号」、「加治道の御嶽」（平良市史）

御嶽編より抄出)「加治道部落の歴代役員」(一九九九年)を収録、「城辺町史資料」5、として刊行している。

加治道部落会は一九二八(昭和三)年四月、比嘉本字から分離して創立されたもので、児童の通学も西城小から城辺小へ変わっている。一九三三〜三六年比嘉長間耕地整理組合を設立して全長約七キロの排水路、約一キロのトンネル工事、一九三五年六月、宮古馬(右流馬号)の皇太子への「献上」、一九五四年九月、町営親子ラジオの全戸架設、一九五五年四月、浦底ダム着工、一九六六年十一月、宮古電力株式会社各家庭への電灯架設などが記録されている。B五判、七六頁、非売品、二〇〇二・三刊。

(「宮古郷土史研究会会報」一三二号、二〇〇二・九・十二)

#### 7. 上野村「村民の戦時・戦後体験記録」

上野村文化財審議会長の佐渡山安公氏は、同村教育委員会の委嘱で同村民の戦争体験の聞き取り調査をすすめていたが、このほど『村民の戦時・戦後の体験記録』恒久平和を願い 子や孫に語り継ぐ…』と題して刊行した。宮古関係の戦争体験記としては、『沖縄県史』、『平良市史』、多良間村、『城辺町史』につぐ刊行である。

巻頭に、川田正一上野村長「歴史体験を教訓として」、狩俣廣一教育長「恒久平和を願って」を、同体験記刊行の意義を明らかにしている。「戦時・戦後を生きて」九点、「海外徴兵」四点、「台湾疎開」六点、「軍事工場・本土就職」四点、「寄稿」二点、以上八項、四八人の体験記にわけて、資料として「野原における戦争被害」「上野村戦没者名簿」など四点を収録、先の大戦における上野村民の戦時体験をおして、平和への願いを浮き彫りにしている。

戦時中の上野村(当時下地村)は宇野原を中心に先島集団司令部

や陸軍中飛行場が設営されるなど、宮古守備隊の中樞をなしていた。それゆえ米英軍の爆撃も集中的にされたようである。「砲弾で家を直撃される」「自活作業に駆り出される」「身重で夫の留守を守る」「飛行場造成に駆り出される」「訓練と作業に明けくれる」「艦砲射撃に惑う」「目の前で爆弾が炸裂」「我が家は作戦室」「自然洞の墓やカーに避難」「防空壕を爆弾が直撃」「砲弾の直撃で父を亡くす」など、表題からだけでも非戦闘員であるはずの民間人さえ常に死と隣り合わせにおかれていたことが証言されている。

もつともなかには大陸や南方戦線での捕虜や慰安婦に関わる証言など、「世界の恒久平和を希望し、戦争の悲惨さと平和の尊さを正しく次の世代に伝えるために戦争体験を収録保存する」と記した村長や教育長の巻頭文とどう結びつくのか、気になる記録もある。A五判、三一頁、非売品。

(「宮古郷土史研究会会報」一四〇号、二〇〇四・一・八)

#### 8. 小禄恵良「人物に見る宮原の歴史」

宮古郷土史研究会の会員でもあり、既に多くの著書をもつ小禄恵良氏が宮原自治会広報紙『みやらはら』第三巻を「宮原集会場落成記念特集」と題して刊行された。集会場に関する特集は、施設の紹介、関係者の挨拶などを五分の一でいとまとめ、大半は「人物に見る宮原の歴史」にさいている。広報紙という一般的な概念からはうっかり見逃してしまいそうな独特の企画・編集である。

この地域の古代英雄「飛鳥爺」(トゥブトゥリヤ)にあやかっつての命名であろう。集会場の名は「とびとり会館」である。市長、議長、支庁長、担当課長らの祝辞、期成会長挨拶、趣意書、経過報告、施設の概要紹介等につづいて、宮原学区の他の公共施設や敬老会など

時事的話題を新聞記事等も利用して紹介、関係者はもとより地域の人びとの歓迎しそうな話題を提供している。

だが、何と言つても本書の圧巻は矢張り「人物に見る宮原の歴史」であろう。すべて近・現代の人物ばかり二六人について、記録や新聞記事、聞き取り等によつて多面的に紹介しているが、政治・経済・産業・教育・学術・芸能：万般に及んでいる。宮原学区の多彩な人物群像には目を見張らせるものがある。

活動歴の古い順からの紹介であろうか。最初は「モテヤ村の池間金戸野さん、宮原の議員第一号」から始まっている。―宮原小学校の所在する地域が、モテヤ村である。モテヤ御嶽の最寄が里の始まりであった、サーズ平原への入口、飲み水もある、白川田の海に近く、海の幸が手に入り易い、いわば理想郷であった、およそこのような書き出しで、土地の所有状況、大正五年、沖縄製糖の誘致に動いたこと、そのために村会議員になったこと、沖糖工場設立後は原料委員となつて、子、孫三代にわたつてつとめ、産業振興をはかり、昭和三年東添信用組合を設立したこと等が様々なエピソードとともに記されている。このような筆致で、以下次の二十五人が紹介されている（敬称略）。

②スナ村の平良真津金・議員第二号、③スナ村の友利玄昌・議員第三号、④増原の根間玄綱・議員第四号、⑤宮積の長浜次郎・戦後議員第一号、⑥宮積の仲宗根玄昌・戦後第二号議員、⑦宮積の垣花玄清・戦後第三号議員、⑧増原の根間玄仁・戦後第四号議員、⑨増原の下地三郎・戦後第五号議員、⑩サーズーの池間青昌・戦後議員第六号、⑪宮積の長浜数子・宮原の民俗研究家第一号、⑫増原の根間玄幸・民俗研究家第二号、⑬モテヤの長浜幸男・政策立案のプロナンバー1、⑭モテヤの伊良部ミヨ・ウーマンパワー発揮、⑮増原

の根間玄令・「三和建設」会長、⑯増原の下地春綱・地域農業振興、⑰スナの平良一夫・郡農協長十二年、⑱増原の喜屋武勇・牛の全国大会出場、⑲北増原の平良幸一・甲子園（野球）出場、⑳更竹の前里光恵・歌声高く弁舌さわやか、㉑増原の洲鎌正篤・宮古民謡界の大御所、㉒増原の喜屋武稔・宮古民謡保存協会会長、㉓増原の下地貞治・ミュージシャン、㉔スナの高橋空・砲丸投げ全国高校六位、㉕増原の安谷屋恵康・名もなく貧しく美しく、㉖土底の照屋健康・名も無く貧しく美しく、㉗増原の下里清俊・四十年前に宮原公民館を建設。

ちなみに『みやはら』第一巻は『広報』一〇二五号（一九九九年度）合本、第二巻が二六〇三九号（二〇〇一年度）の合本であることからも、第三巻のユニークさがうかがえよう。A四判、一三〇頁、二〇〇六・四・二九刊。

（宮古郷土史研究会会報）一五五号、二〇〇六・七・十三

## 9. 国仲晃行「来間島の風土と社会」

来間島出身で在京の国仲晃行氏がこのほど「来間島の風土と社会」を刊行した。高齢者の他界にともなつて「口承されてきた島の文化や慣習も消え去る」ことを危惧して、「島の風土や社会に関する資料を記録として残すこと」の必要性を「島に生まれた者として」、古老からの聞き取りや各種文献等を整理してまとめた（「まえがき」と記している。「風土」と「社会」の二章構成である）。

「風土」は、1島の起こり、2御嶽・拝所、3年間行事、4来間島の民話・伝説、5島の風習、6墓、7来間島の呼称・位置・地形、8来間島の遺跡・史跡・旧跡、9植生、10動物、11来間島及び島に関する歌、と詳細をきわめている。「社会」は、1島の行政、2教育、

3人物、4生活、5自然災害、6福祉、7貢租(年貢)と土地制度、8産業、9特定非営利活動(NPO)法人、10環境保全、以上十の領域で、来間島の全般に及んでいる。

古琉球以来、近・現代に至る来間島の考え得る限りのすべてが、このように一卷にまとめられて上梓されるのは本書をもって嚆矢とされよう。著者は一九四一年生。来間小・中学校から宮古高校を経て、東京の理系の大学に進み、卒業後は製薬会社の研究部門に職を得ながら、大学の研究室に所属して、医学博士の学位を得るなど、生粋の理系人。「島を離れて生活していることに心苦しい思いもするが、生まれ育った島に対する愛着は捨てられない」、このような著者の愛郷心を反映した、名実ともに来間島の「百科事典」ともいえる内容で、巻末の年表も便利である。B五判、一九二頁、特定NPO法人「ウムヤス来間島」(仲松義雄代表)刊。

(「宮古郷土史研究会会報」二二七号、二〇一八・七・十六)

#### 10. 上地慶彦「ニヤーツ方言」標準語引き

宮古島上水道企業団の企業長(特別職)を任期満了で退任したあと、旧平良市の教育委員等もつとめた上地慶彦氏がこのほど、以前に上梓した「ニヤーツ方言」を若い世代の要望に応じて「標準語引き」で再上梓した。

「ニヤーツ」は平良でもっとも歴史の古い地域とされている、「盛加井」を中心に発展したであろう、東川根の東に位置する三十戸足らずの純農村であったが、近年は市内外から移り住む人が増えて、市街地化している。それでもそこで生まれ育った世代にとって、土地の言葉は郷愁をさそうのであろう。

もはや圧倒的多数は戦後世代であり、唯一の娯楽であった映画は

もとより、ラジオ、テレビ、くわえて学校教育、核家族ときては日常は共通語の世界である。とはいえ感性的な言葉は思いがけず飛び出すものであろう。雨に濡れば「アイジャァ!」、どこか痛めると「アガ!」と叫ぶという。上地氏は文化協会主催の「鳴りとうゆん宮古方言大会」では審査員をつとめ、三世同居時代に育った八十代で宮古方言に精通している。ふるさと「ニヤーツ」の後続世代の要望を受け入れるのに迷いはなかったろう。

「ニヤーツ方言」の初版は三十年も前、一九九三年の刊行であり、その後の世代にはもはや「共通語引き」でないと利用しにくいのであろう。ふるさとの後続世代のために著者は改めてひと肌脱いだのである。

#### 1. 「カーウリ」と「クバヅ」

上水道が普及する以前の宮古の生活用水は天水か、各地に点在する「うりがー(洞井)」などの湧き水であった。数十段(ムイカガーは一〇三段)のらせん形の石段を上下しての水汲みは、水汲みとは言わず、「カーウリ(井降り)」と称していた。

近代に入って掘り抜き井戸が登場し、釣瓶で汲むようになって、「カーウリ」と称している。掘り抜き井戸で水を汲むようになって、「クバヅ」と称していたが、金属製や木製の釣瓶が出廻るようになっても「カーウリ」同様「クバヅ」と称していた。もはやそれらの呼称を知る世代は少数派であらう。

#### 2. 「又、廻ってお出で」

久しぶりの出会いについては「ミィードウムヌ」と言う。ミィーは見る、ドウは遠い、長いの意味もある。ムヌは者であり、「長期間会う機会がなかった」ということだが、「ミィードウムヌ」とは方言



世代にとっては実感がこもっている。

「マタ、マーリクローヨ」は、直訳すれば「又廻って来いよ」だが、真意は「又、廻ってお出でね」と実感がこもっている。いたずら好きな人は入り口まで行って引き返してくる。「何か忘れものでも？」と問うと、「お前がまわってこいと言ったではないか」となる。

「ゾー」は門の意である。定刻はとくに過ぎ、家も早々に出たであろうになかなか姿を見せなかった友に、「ノーシヌ長門ヤーヤリヤ、シナマガミ来ンガ」という。どんな大きな屋敷だから門までそんなに距離があるのか、なかなか着かないね、と座興にされる。

「ナラース」は「習わず」で、「教える」の意であるが、俗にいう宮古普通語で「教えてください」と言っているつもりで、「お習いしたいのですが…」と、うっかり自分に敬語を使ったりする場合がある。

「ヤマシタ」は「病ました」であろうが、普通どこか痛かったりするとき使う。電車に乗ってうっかり隣の人の足を踏んでしまい、詫びるつもりでつい「ヤマシタか」と宮古普通語を使ってしまったら、「いや、タケシタです」と言われたとの小話をひところよく聞かされたものである。

### 3. 響動むー豊見親

「カム、トウユウン」は「雷(神鳴り)」のことであり、漢字では「神響動ん」となる。天空から神鳴りの如く響動むー鳴りとどろいている、とおそれられたのである。宮古では歴史上の当て字で「響動む」は「豊見」となり、尊称の「親」をつけて、「豊見親」一名高い統率者・支配者を意味する。琉球王国に組み込まれる以前の、「自立」していたであろう宮古の人びとが、自らの支配者を響動む人「豊見親」と尊称していたのであろう。与那覇勢頭豊見親、目黒

盛豊見親、仲宗根豊見親…らが、宮古の歴史上広く知られている。

宮古の歴史上、支配者の名は人びとが呼称したのであろう。「豊見親」以外には、「大人」「大殿」「按司」などが伝えられているが、その呼称はそれらの出自(渡来先)に由来するのではないかと考えている。これまで紹介した言葉は大方平良一帯でも用いられている。

### 4. 人頭税社会の名残り

三十戸足らずの小集落でもこのように地域性豊かな言葉が伝えられているのは、近世から近代初期にかけての人頭税社会の名残りであろう。人頭税は数え十五〜五十歳の男女の個人責任であるとともに、村全体の連帯責任でもあり、人びとは事実上村を越えての婚姻さえもままならない閉鎖的におかれていたせいであろう。言葉は文化の基礎であり、地域文化を知るには、方言も共通語同様に大切にすることが求められている。

著者のふるさと「ニヤーツ」に寄せる郷土愛と、後続の若者たちへの心遣いに敬意を表するものである。

(宮古郷土史研究会会報「二四九号、二〇二二・三・一九」)

### 11. 川満信一「宮古歴史物語〜英雄を育てた野崎の母たち」

詩人で思想家、ジャーナリストとして多くの著書・論考を持つ川満信一氏が、初の長編小説『宮古歴史物語』を刊行した。副題に「英雄を育てた野崎の母たち」と明記することで、著者の生まれ育った野崎―久貝・松原―への熱い思い、ひいては執筆の意図を鮮明にしている。

宮古史を正面から作品化すれば結局のところよく知られた通史をなぞるだけで終わりがかねない。女性を中心に据えることで表(陽)を支えている裏(陰)の世界にまで光が届き、宮古史がより具体的

に見えてくるといふことであろう。著者自身は故与那覇和彦氏の著書『振り返る日々』(?)に欠ける、古代史の部分を補って『久松の歴史』にする構想を持っていたが、「野崎の母たちが育てた英雄たち」の活躍の舞台は、宮古全域はおろか琉球から韓国、中国、東南アジア諸地域にまで及んでいる。とても「久松という小さな村」には収まらなかった(「はじめに」)からだとして記している。

宮古通史の古典的著書として知られる『宮古史伝』(慶世村恒任、一九二七)、それにつづく『宮古島庶民史』(稲村賢敷、一九五七)等に共通しているのは、宮古史の始まりを宮古旧記類の伝える神話・伝承に求め、始めに登場する人物を「野崎・中井の里の真牛」としていることである。真牛は、宮古の古代史を彩る群雄―目黒盛、飛鳥爺、仲宗根豊見親(玄雅)らの遠祖であり、さらには初代大安母となる仲宗根豊見親の妻・宇津目嘉、二代目祭金(玄数)の妻・免嘉も野崎・赤宇立の生まれである。与那覇勢頭豊見親、糸数大按司、大立大殿、少し下って金志川豊見親兄弟、土原豊見親ら、古代史の群雄はすべて真牛ゆかりの人物との関わりのおかげで登場している。著者が視点を「野崎の母たち」に据えた論拠はきわめて明快である。「島始め」神話から、いきなり中井里の真牛に入ることを異としないのは、ミヤールカ群、中国渡来七人兄弟、来間島立ての由来、豊見親の妻はアコウダテイ系統の女性たち、等々の伝承から、「中世またはそれ以前には野崎村が人口密集地」(「目黒盛豊見親と野崎」)つまりは宮古の中心地だったのではないか、「平良中心の史観を少しずらして見ることも面白い」という認識に立つからであろう。本書は三章構成である。第一章「群雄(天太、按司)の時代」、第二章「豊見親の時代」、第三章「豊見親から頭時代へ」である。一読して『宮古史伝』の章分けに準拠していることがわかる。ちなみ

に『宮古史伝』は、第一篇「天太の代以前」、第二篇「争乱時代」、第三篇「豊見親の代」、第四篇「大親の代」とつづく。一、二篇は第一章に、三篇は文字どおり第二章に、四篇は第三章に対応している。大親とは頭の俗称である。『宮古史伝』は宮古旧記類、わけても二十六条の事柄で構成される「宮古島記事仕次」は主要出典の一つである。それゆえ本書では『宮古史伝』や『宮古島庶民史』を引用しつつも、必要に応じて「記事仕次」に戻り、独自の見解を展開している。とくに古謡等については当て字の多い漢字読みを避けて、野崎方言に依拠した新たな表記・解説を試みている。赤宇立を「安公里」のように……。

著者の本書にかけた思いのたけは別の面からも汲みとることができる。「中学・高校の歴史副読本として」活用されることを期待して、「文章を平易」にする反面「将来、中里介山や吉川英治、井上靖らのような数多の時代小説家が現れて、宮古の歴史の登場人物たちに、息を吹き込み、その具体的なドラマを描き出すことがないとは言えない。そのときこそ、宮古の子孫たちは、織田信長や豊臣秀吉、水戸黄門、宮本武蔵らに相当するような、もっと身近な英雄像に親しみ、歴史の確かさを自分のルーツとして所有することができるであろう」(「まえがき」と記すのである。周知の著者の思想的言動とどこで接点を持つのか興味深い記述である)。

巻末に収めた『宮古史伝』の著者・慶世村恒任の遺児・平恒次米国イリノイ大学名誉教授の「川満信一『宮古歴史物語』を讃える」も本書の世界に通底するようで、いっそうその感を深くする。

(「宮古毎日新聞」二〇〇四・一〇・二)

12. 宮古郷土史研究会『新版 宮古の史跡を訪ねて』

## 1. 「宮古史」入門

既に「宮古毎日新聞」でも紹介されているように、宮古郷土史研究会はこのほど「新版 宮古の史跡を訪ねて」を出版しました。「新版」としたのは、一九八九年十一月「初版」が出ているからです。

「初版」は八八頁、収録件数八六件ですが、「新版」は一三三頁、一二一件の収録で、ほぼ五割アップです。執筆者八人で編集委員会を構成、その後の研究成果も踏まえて「初版」内容についても一件ごととに検討、さらに追加分についても同様検討して定稿としました。平良新亮、佐渡山正吉、下地康夫、岡本恵昭、砂川幸夫、下地和宏、下地利幸、仲宗根の八人です。

「新版」には史跡以外のすべての国・県・市町村指定文化財の一覧表も収録しました。宮古の歴史上の舞台を探访する際の手引きであるばかりでなく、宮古史入門書としても役立つことでしょう。

## 2. 史跡巡り

宮古史ゆかりの舞台を直接見聞する「史跡めぐり」に初めて参加したのは、一九六五年春のことです。沖縄県社会科教育研究会宮古支部（砂川禎男支部長）と、教育研究会に向けてそのつど再編される教職員の社会科同好会共催によるものでした。「社会科学習において郷土資料への理解を深める」ねらいで企画された催しへの便乗です。解説は当時砂川中学校長の故下地かおる先生です。

城辺バス停発着の大型バス一台を借り切った史跡めぐりです。九時四十五分出発、久松、下地、上野、城辺の順でめぐり、五時半終了でした。解説は「都（宮古）なるも田舎なり」から「花のミヤコ」などと、およそかおる先生には似つかわしくない駄ジャレ入りのメイ調子。久貝ぶさぎ、池田缸、「独逸商船遭難之地」碑、上比屋山、人頭税撤廃運動「顕彰碑」、保良泉…など、宮古の古代く近代

にわたって通史的理解を深める上で、書物とはまたひと味違う貴重な体験をさせてもらいました。

同年十月には、歴史教育者協議会宮古支部が結成され、多良間騒動、落書事件、サンシー事件など、民衆史の掘り起こしとともに、そのゆかりの地を歩く取りくみも始まりました。

## 3. 稲村賢敷

大型バスによる史跡一巡は先の社会科の先生方の試みが戦後初めてのようですが、手引きの方はすでにそれより十数年前に出ています。故稲村賢敷先生の「宮古島史蹟めぐり」で、B五判六二頁、一九五〇年四月十七日発行です。当時は印刷施設が十分ではなかったようで、ガリ版刷り。発行所は「郷土研究社」、販売所は「西里大通り下地玄令商店」、定価は「四十円」と明記されています。内容は「漲水御嶽」から「多良間島抱護林」まで五十二件。

「はしがき」では「挿絵は下地明増君が実地に写生して下さって、さらにこれらを鉄筆の尖で表現していただきました」と記しています。「序」は、宮古教育会長・池村恵信先生の「宮古島史蹟めぐり」で、冒頭「史蹟は祖先の生活の足跡であり、文化の遺産である」とした上で、「子供を中心に一家団らんの読物」としても、「各学校の遠足や社会科の副読本として良き読み物」であると推奨しています。祖先の足跡を示す初の手引きは大いに重宝がられたことでしょう。

## 4. 高まる地域史への関心

しかしその後数十年「史跡めぐり」が実施された形跡は見当たらず、一九六五年の社会科の先生方による催しがひとつのきっかけをつくったようです。

一九六七年十一月、仲宗根恵三、吉村玄得、本村武史、玉木玄教、当間林光氏らによって宮古文化財を守る会が結成され、定期的に史

跡めぐりが始まります。さらに一九七三年秋に始まった県立図書館宮古分館の郷土史講座の中に史跡めぐりも位置づけられ、その受講者を中心に、宮国定徳、池村恵祐先生らによって一九七五年四月、宮古郷土史研究会が設立されました。前後して市町村の文化財保護行政、修史事業も始まっています。P T A等の「史跡めぐり」も盛んです。

いまや郷土史、地域の歴史や文化に対する一般の関心は、ひところにくらべて大きく前進しているように思われます。むしろ日常的とさえ言えそうです。但し、若い世代へどう広げるかは、引き続き大事な課題と言えるでしょう。

### 5. 先学に学ぶ

宮古郷土史研究会の活動も「新版 宮古の史跡を訪ねて」も、すべて前述の諸先学の歩み、成果に学び、継承しての成果です。幸い「初版」と違い、「新版」は麻姑山書房の「厚意で発行できました。記して謝意とします。多くの市(郡)民が「宮古史入門」用に、家庭で、職場で活用してくださるよう、願うものです。

(「宮古毎日新聞」二〇〇〇・一・一五)

### 13. 『城辺町史』別巻「宮古史年表」

このほど『城辺町史』の別巻「宮古史年表」が刊行された。一九七九年五月に始まった城辺町史編さん事業としては五巻めに当たるようだが、年表だけを独立して一巻に収めたのは県内市町村史では初めてではなからうか。先発の『平良市史』第一巻通史編Ⅰ(古代〜近代)並びに第二巻通史編Ⅱ(戦後)の年表を底本にしているとはいえ、『沖縄県史』はじめ既刊の宮古各町村史誌等はすべて参照した上で、平良市史刊行以降一九八〇〜二〇〇五年についても地元紙

や県紙等丹念にめくって編集されている。宮古史年表整理の水準を示す最新の成果といえよう。

本書の特徴は、第一にその部厚さであろう。頁数の多さは収録された事柄の多さを示すものであり、それだけに年月をかけた苦心のほどを反映している。二つめは、暦年の取扱いである。西暦、日本年号、中国年号、この三つは通常どこの年表にもみうけられるが、本書にはさらに「干支」がついていることである。内容面では、琉球一円をふくむ宮古については、「事項」とし、「日本・世界」の主な事例と対照できるように配慮されている。さらに一六〇九(慶長一四)年、薩摩藩の琉球王国支配以降、一九四五年八月、太平洋戦争終結までは、「事項」が「政治・経済・産業」と「社会・教育・文化」に二分化され、いっそう詳細をきわめている。それ以降、現代の分野では、西暦、日本年号、中国年号、干支を横組みに改め、その分事柄の説明に多くの紙幅をさいている。

三つめに、近代以前の重要事項には出典を示していることである。琉球王府整備の「球陽」はもとより、「御財政」「里積記」、宮古旧記類、「沖縄県租税制度」や「宮古島取調書」ほか。四つめは、地理的・歴史的に琉球・沖縄県と密接に関わる隣県『鹿児島県史』が活用されていることであろう。

二、三例をあげよう。年表一行めは、西暦―五八九年、日本年号―未だなし、中国―開皇九年、干支―己酉、事項―なし、日本・世界―隋、中国を統一する、である。琉球関係の初出は、六〇五年、推古一三年、大業元年、乙丑―隋の煬帝、海師何蛮を流求に遣わす(隋書)、日本(本土)関係では、六一六年、推古二四年、大業一二年、丙子―掖玖人三十人大和朝廷に帰化する(このころから“南島人”文献にあらわれるようになる)(日本書紀)というぐあいである。

宮古関係の初出は、一三二七年、文保元年、延祐四年、丁巳、6・17—『元史』『温州府志』婆羅公管下密牙古人が中国温州に漂着と伝える、である。周知の沖縄本島の王権との接触のくだりは、一三九〇年、元中七年、洪武三年、庚午—与那覇勢頭豊見親、八重山の首長をとめない中山に入貢と伝わる、などである。

『鹿児島県史』を活用したものには、一六〇五年、慶長一〇年、万曆三三年、乙巳、7—島津氏の使者、將軍家康に琉球出兵の許可を請う、一六〇六年、慶長一一年、万曆三四年、丙午、9・1—幕府、島津家久に「琉球征討」を許可する、一六〇八年、慶長一三年、万曆三六年、戊申、8・19—島津家久、僧龍雲らを琉球に派遣し尚寧王の来聘を要求するが、琉球応ぜず、要旨このような経緯をへて、一六〇九（慶長一四・万曆三七・己酉）年、薩摩藩の島津氏は兵三千を差し向けて琉球王国を制圧した。なかには、一六一三（慶長一八・万曆四一・癸丑）年六月一日「免許のない日本商人の宮古島への渡航を禁止する」などもある。

いくつか気になる点も指摘しておきたい。一五九七年（慶長二・万曆二四・丙申）年に「長真氏旨屋・河充氏真逸ら中国へ漂着、甘藷を持ち帰ると伝えられる」、一六一八（元和四・万曆四六・戊午）年「宮古に甘藷伝わる」と二つでている。また、一八九二（明治二五）年四月「西辺尋常小学校狩俣分教場設立される」の次項に、同年九月二十日「西辺尋常小の火災で大浦尋常小と合併して西辺尋常小学校と称する（野田）」とあるが、この方は、狩俣にあった西辺小が消失したために野田にあった大浦小に合併して西辺小を称し、狩俣には分教場を置いた、というのが実際の経緯ではなからうか。

このほかいくつか誤植らしいのがみうけられるが、情熱の歌人・与謝野晶子をして外出をはばかるほどに、「校正（後世）恐るべし」

といわれている。活字文化が導入されてこの方、「校了」（校正終了）とは、まだあるかも知れない誤植（校正の見落とし）を諦めることだとさえ言われている。この程度の誤植で本書の価値が下がることはなからう。

年表五一〇頁につづいて、巻末に付された一二五頁にのぼる附録、「宮古島旧記」の世界、村落の変遷、学校の変遷、歴代の大首里大屋子、首里大屋子、県会議員、支庁長：など十三点は、それ自体独立した貴重な情報であると同時に、年表の理解をいっそう深めてくれよう。

なお当初の『城辺町史』編さんに関わった委員は、島尻勝太郎、砂川泰信、波平勇夫、宮国文雄、下地和宏氏らで、これまでに刊行されたのは、第一巻・資料編、第二巻・戦争体験編、第五巻・民話編、第六巻・歌謡編の四点。通史編等は市町村合併で積み残しになったのであろう。本書巻末に明記された編さん委員は、委員長—垣花豊順、副委員長—宮里久男、委員—波平勇夫、下地玄栄、本永清、島尻澤一、平良勝保、栗国恭子、宮里尚安、山里正一、下地敏夫氏ら十一人。担当は下地和宏氏ら。宮古はまた一つ貴重な知的財産を得たことになる。諸士の労を多とするものである。二〇〇五・九・三十刊。

（「宮古毎日新聞」二〇〇六・八・三一）

#### 14. 平凡社「沖縄県の地名」

地名は土地に刻まれた記憶—歴史だという。それゆえ自然・風土ばかりでなく、その時々々の社会的動向等も反映して、その地域特有の、あるいは地域的広がりをもったさまざまな共通地名が生まれたりするのであろう、

古代日本にあつては、九州の南の種子島・屋久島以南の島々は総称して「南島」とよばれていた（『日本書紀』ほか）。交流が密になるにともなつて、次第に島々の状況は鮮明になり、個々の島名も明記されるようになったのであろう。今でこそ「太平山」といえば宮古の別称として知られているが、古琉球においては宮古・八重山の総称であつた（『百浦添欄干之銘』）。近世以降は宮古のみを特定するようになり、代わつて「先島」あるいは「両先島」ともよばれる。奄美諸島の「道之島」に対応する「先之島」のようである。

奄美以南、与那国までの島々の先史時代は「琉球文化圏」とも総称されている。しかし奄美・沖繩諸島（北琉球圏）が九州の縄文・弥生文化の影響をうけているのに対し、今のところ宮古・八重山（南琉球圏）には、その痕跡はみあたらない。大陸南部や台湾、フィリピンなど東南アジアに通ずる文化であつた、とみなされている。当時の航海技術をもつてしては、沖繩本島と宮古の間をへだてるおよそ三百<sup>キ</sup>の大海を乗り越えることは困難であつたのであろう。

宮古・八重山が沖繩本島以北と密な交流を始めるのは、十一世紀以降からである。異文化圏の北と南が一つの文化圏「琉球」を形成しはじめるのは、グスク時代からということになる。十五世紀後半、三人の朝鮮・済州島人の、与那国島・宮古島までの見聞談（『李朝実録』）も、南方色濃厚な文化の上に沖繩本島以北の文化が、宮古島・伊良部島・多良間島：・と、次第に伝播（<sup>でんぱ</sup>）しつつある状況を明示している。

十七世紀以降、整備された「中山世鑑」など琉球正史類は、宮古・八重山が沖繩本島の王権と公的交渉をもつたのは、十四世紀末と記している。「言語三年にして通ず」と明記するほどに、言語のへだたりは大きかつたようだ。現在も言語学の成果は、本土の言語と琉球

諸島の言語は規則的な対応関係にあつて、祖を一つにしているという。しかし両者はすぐには理解できないほどへだたっている。同様に、沖繩本島と宮古（八重山）も互いには通じ合わない。同じ宮古内でも島ごとに特徴をもち、理解できない方言もある。なかには仮名文字では表記できないのもあつて、他地域の人びとに方言で伝えるのはきわめて困難である。

それゆえ近世には首里方言が琉球全域の共通語的役割をはたしていたように、宮古では平良（ピサラ）方言、八重山では石垣（四箇）方言が共通語的機能をしていたのであろう。十八世紀整備の「宮古島記事仕次」等は、軍記物風にまとめられているが、随所に方言らしき言葉がでてくる。日常は方言で生活していたであろう役人たちが、公的文書作成にあたっては和文を用いていたことを示すものである。

近世宮古の行政区画は、平良・下地・砂川の三間切（郡）である。平良は宮古の首邑（<sup>しゅい</sup>）を意味し、宮古の別称でもあつた（『中山世譜』）。下地は平良の下（しも）に位置する名称と考えられている。それは砂川（うるか）は何に由来するのであろうか。平良の北方は今も方言では「西辺」（ニスナギ北の辺り）と称しており、東方は近世このかた「城辺」（グスクナギ）である。この地域が“グスク”とよぶにふさわしい特徴を保持していたのであろう。東北地方に残るアイヌ語の地名によつて、アイヌが北海道ばかりでなく本州にも住んでいたことが証明されている。同様に、先史文化の異なる宮古・八重山にも琉球方言を話す人びと以前、先住者がいたであろうことからすれば、それら先住者の話す先行言語の痕跡も地名には残されているのではなからうか。

地名にはその土地に生まれ、生活した人びとの生きた証しが、歴

史的時間をへて色濃く反映している。歴史はもとより、言語、民俗、生産、親交、地理など各方面にわたって凝縮されており、地域の現在と将来を考えるカギを秘めている。地名は貴重な文化財だといわれるゆえんである。

「沖縄県の地名」刊行記念シンポジウム「沖縄の地名と歴史―何が問題なのか?」は八日午後四時から六時、那覇市の八汐荘で。コーディネーターは高良倉吉氏。パネリストは赤嶺政信、安里進、池宮正治、金城善、新城敏男、田名真之、中村誠司、仲宗根将二、西里喜行、目崎茂和の各氏。詳しくは同編集委員会、電話03(3957)8346。

(「沖縄タイムス」二〇〇三、二・五)

〈付記〉

「総論」を狩俣繁久、「琉球国」を豊見山和行、「宮古諸島」を下地和宏・平良勝保・仲宗根将二・山里純一、「考古」を下地和宏、「文学」を上里賢一、「用語解説」等を豊見山和行・仲宗根将二・長間安彦・ほか、担当している。

## 第二部 文芸と芸能

### 1. 仲元銀太郎エッセイ集『流れ・流され』

四十年教職に従事、退職後なお二十余年、各分野で活躍して、一九九八年十二月一日永眠された上野・野原出身、仲元銀太郎先生の、いわば遺稿集である。一周忌を記念して、故平良好児主宰の季刊誌『郷土文学』に一九七四年一月〜九五年五月迄に掲載された作品が遺族によってまとめられている。最終掲載となった「終着駅」で巻頭を飾り、あとは内容別に大まかに五つの領域に分類している。「教

師雑感」一九点、「故郷回帰」二七点、「世のうつろい」一八点、「郷土史考」一一点、「作詞背景」八点、計八四点である。

「教職雑感」は文字どおり教職への回想であり、戦前・戦中の「皇民教育」に従事した反省もこめられている。「故郷回帰」は退職後の、土に生きる小学校時代の級友とのまじわり、「世のうつろい」は、天皇雑感、湾岸戦争、戦後の原点など、激動する世相への感想で、「冷戦」後の日本の進むべき道は、「日米安保体制と対米従属型日米軍事同盟ではなく」、「平和憲法の非武装中立主義を徹底的に実践すること」(「冷戦」後)との指摘もある。「郷土史考」では、上野村に伝わる祭祀「シナフカ」や歴史上の人物として伝えられる「ウーニヌ親」「コージンミガガマ」などへの考察とともに、砂川明芳大兄の一連の『宮古島郷土史考』の著作に示された「三天法」から「正三角形」への論考への感想もある。「作詞の背景」では、「新宮古建設の歌」や「大神校校歌」のうまれる経緯が臨場感をもって紹介されている。「作詞の背景」以外はすべて『郷土文学』誌上で、そのつど一度は目をとおしているはずなのに、こうして一つにまとめたかたちで読むと、故銀太郎先生の息づかいまで聞こえてくるようで、感慨ひとしおのものがある。四六判、二六八頁、一九九九・一二・一刊、非売品。

(「宮古郷土史研究会会報」一一六号、二〇〇〇・一・一五)

### 2. 渡久山春英『明解 宮古あやぐと人頭税』

多良間村字仲筋出身の著者が四十年近い教職生活を一九九七年三月定年退職した記念に、三年余かけて著わした珠玉の宮古民謡の鑑賞書である。表紙と巻頭には「なりわいにあえぐ雄叫び先人の蜂起わするな豊かなるとも」と記し、収録された「あやぐ」はいずれも

近世琉球をとおして二百数十年、宮古・八重山の民衆に課せられた人頭税に由来するものに限ったことを明示することで、著者の本書によせる思いを鮮明にしている。

収録された民謡は、祝い歌三、恋の歌三、別離の歌三、人頭税の歌三、子守り歌二、報恩の歌一、建築の歌一、遊興の歌二、友情の歌一、説論の歌一で、十領域に分類している。さらに一点ごとに解説と関連する琉歌と自作の短歌を添えて、民謡にこめられた民衆の真情への理解をたすけている。たとえば人頭税の歌とされているのは、豊年の歌、漲水のクイチャー、豆が花の三点だが、豆が花については「農民が人頭税の役人と直接対話する情景をうたった」もので、前半は「畑一面の朝露に光る豆の花の美しさを、うたい」、後半は「地主（農民？）の娘に眼がくらんだ役人と、父親との口論となり、父親の一步も譲らない毅然とした姿」をうたっているとし、そのあと逐条解説をしている。その上で関連する琉歌と自作の短歌を各七点そえている。前半冒頭の琉歌「夏ぐれのすぎて露の玉むすぶ庭のなでしこの花のきよらさ」、自作の歌「一面に朝露浴びし豆の花玉のるり色揃い咲きたり」、後半の一首は、琉歌「乱れ世になれば鷹も地におりて雉と共に掻きやり食はたり」、自作の歌「娘あり好色役人に見初まれど父敢然と立ちばばかりぬ」である。

巻末に、「多良間騒動」と、「総代事件（シユウダイジキン）」について簡潔な解説がついて、近世宮古の社会を知るたすけになっている。「あとがき」には、「先人は自然を大切にされた。先人から受け継いだ島の緑・芬々を未来へプレゼントするのが、我々に課せられた責務ではないだろうか。それとも、地域発展のための開発なら、自然破壊はゆるさるべきなのだろうか」と記し、ここで著者の掘って立つ所を鮮明にしているようだ。二〇〇〇・七刊、A五判、一九

七頁、百部限定自費出版。

（宮古郷土史研究会会報）一二〇号、二〇〇〇・九・十六

### 3. 日本児童文学者協会「沖縄の童話」

「沖縄の童話」が“県別ふるさと童話館シリーズ”の一巻として刊行された。「はじめに」によると、全五十巻の同シリーズは日本児童文学者協会創立五十周年記念出版と銘うたれ、「全国の子どもたちのふるさと意識をよび起こすだけでなく、地域的に身近な題材の作品にふれることによって、読書の楽しさの発見につながることを願って」の刊行である。全体にかかわる編集委員のほか、県別に編集委員会が委嘱されるよう、沖縄県は、岩崎京子、しかたしん、徳田渢、野里寿子ら四人。童話十四、詩三の十七編で、大方は古い習俗を題材にした創作だが、「沖縄戦」に題材をとったもの三点、学童疎開船対馬丸遭難を扱った作品もある。地域別には、沖縄諸島十二、宮古二、八重山三編となる。宮古関係は、米村勤子「どこにいても」、もりおみずき「タマツツリー」の二編。

「どこにいても」は、父親の転勤で宮古から沖縄市へ引っ越した五年生の男の子が主人公である。「青い海・青い空」の「しずかでのんびりしていた」宮古から「英語のまじった看板」がならび、「はでな商店やゲームセンター」がたくさんある賑やかな都市の暮らしになかなかなじめず、ひとりぼっちの少年に親しく近づいてきた少年が、実は少年のなかのもう一人の自分であることに気づくことで、「もう、どこにいても元氣だ！」と元氣を取りもどす、幻想的であり、きわめて現実的な話題をもつ童話である。「タマツツリー」は、クリスマスプレゼントに自転車を買ってもらった弟が、乗れるようになって間もなく、車にはねられる。一年前の骨折で寝たきりの祖



母は「ユタ」で、村の「ウヤガン（祖神）祭り」にかかわる「神人（カミンチュ）」で霊力を持ち、主人公の少年を介して弟の魂をよみがえらせる、いわば宮古の習俗「タマスウカビ」で命を救う話である。村の聖なる「フンムイ山のマダマウタキ」の大きな「命の木」「アコウの木が巨大な光の木になってかがやく」ことで、クリスマスツリーならぬ、「タマスツリー」なのだ。

巻末の「解説」（しかた しん）は、十七編をみじかく手ぎわよくまとめていて好感をそそるが、冒頭「読みやすいように、できるだけ本土の言葉を使つた」とあるのはどういう意味であろう。普通教育は近代この方、全国どこでも、いわゆる「共通語」であり、現在それ以外の言葉（文）で沖縄県の子どもたちに理解させる言葉（文）はないのではないか。また仮りに那覇方言で文章をつづつたとしても他府県どころか、沖縄県の子どもたちさえも理解できないであろう。ことさらに全国「共通語」を「本土の言葉」という意がよくわからない。ついでに付記すれば、童名は「大和名」（どこにいても）ではなく、かつては「戸籍名」または「学校名」と言っていたのではなからうか。また、「ユタ」「カミンチュ」（「タマスツリー」とは、沖縄本島の方言であり、宮古では「カンカカリヤ」「カンヌピトゥ」で、カンカカリヤのような巫女を「ウヤガン」の神事にかかわらせるのはどうであろうか。二〇〇〇・一〇・一〇刊、A五判、一九二頁、一七〇〇円、リブリオ出版。

（「宮古郷土史研究会会報」一二二号、二〇〇〇・十一・九）

#### 4. たいらてつ『実況中継 くみたままきいたまま』

『花・コスモス』に次ぐ著者二つめの随筆集・前著は地元紙に投稿した作品集であったが、今回はすべて書きおろしのものである。

二〇〇〇年八月から二〇〇一年三月まで、毎月二回〜三回でいど、平良市街地の通りを歩いて、街並みを観察、考現学風に「世相」を「実況中継」したものである。

著者は昭和一ケタの生れゆえ、太平洋戦争で平良の街並みが焦土と化したときは国民学校初等科六年を卒えて中学校にあがるころ、おそらく戦前の平良の街並みを知る最後の世代ともいえよう。一つひとつの通りを歩いて「実況中継」するばかりでなく、焼失前の緑の並木多い街並みをダブラせるなど、戦前世代には懐旧の情をかきたてるとともに、将来の望ましい平良のまちのありようについても考えさせる一助ともなる。章立ても、通常の「第一章」あるいは「第一話」などとせず、通りをあるくということ踏まえての「実況中継」にふさわしく、あっさりとして第一回、第二回と、十五回まで、つまり十五通りの「実況」くみたままきいたまを伝えている。

第一回は「ペンションスターから恵子美術館」で、下里通りの紹介である。第二回「漲水港から平良港」で、港の歴史にからめて、国指定文化財「トウユミヤ墓」から、今は埋め立てられてしまった、そのかみの若ものたちの青春の語らいの場「ポー崎」や「サツフィの浜」まで回想する。このような調子で、第三回平良港ターミナルからプリマート、第四回宮古郵便局四辻から漲水港、第五回郵便局四辻から市立図書館、第六回古謝食堂界隈から小屋毛界隈くウヤグスくとみや商会一帯、第七回郵便局四辻から北市場くなかや通り、第九回YAMAKO四辻から旧山市商店四辻、第十回旧山市商店四辻から福嶺医院四辻、第十一回琉球銀行宮古支店裏通り、第十二回市場通り・通り拡張前、第十三回福嶺医院四辻からAコープ平良店、第十四回福嶺医院四辻から下里四辻、第十五回平良市下里公設市場、以上の構成である。通りに面した商店、官公衙、住宅、空地に至る

まで、すべて略図がついていて、用足しや買物はもとより、往時を回想しながら散策にも恰好の手引きである。B六判、一六二頁、私家版、二〇〇一・六刊。

〔宮古郷土史研究会会報〕一二五号、二〇〇一・七・十二

##### 5. 上里賢一選・訳・茅原南龍書「琉球漢詩の旅」

漢詩も書も門外漢ではあるが、何故かひかれるものがあって、一九九三年元旦から一年間、五十二回『琉球新報』に連載された上里賢一選・訳の「琉球漢詩の旅」をそのつど切り抜いて、折にふれ目をとおしていた。それが書家・茅原南龍麗筆によって一卷にまとめられた。感無量の思いである。

本書には近世琉球の詩人二三人の作品五二編が収録されている。宮古を題材にしているらしいとみなされるのは、白鳥崎をうたった毛有慶・亀川盛棟の「：逆風に遇い太平山に漂到す」の一編だけである。しかし丹念に目をとおしていくと、至るところに宮古が紹介されていることに気づかされる。近世末期の子年飢饉（ニンテイ・ヤーツス）、廃藩置県後の先島分島問題、一九〇六（明治三九）年池間や狩俣が始まったカツオ漁、ロシア人の東洋学者で三度宮古を訪れたニコライ・ネフスキーの「月と不死」などである。さらに登場する作者のなかには、琉球正史「球陽」を著わした蔡鐔・蔡温父子、「六諭衍義」の名護親方・程順則、「琉球処分」当時の激動の時代を記録した「琉球見聞録」の著者喜舎場朝賢らも登場する。

本書を手にすることで、近世琉球の「漢詩の世界」と幽遠な「書の世界」を觀賞できるばかりでなく、当時の人びとの教養の高さをも知ることができよう。併せて『琉球新報』の記事と写真で、漢詩の舞台となったゆかりの場所―県内各地域へのイメージを人それぞれ

れにふくらませることもできる。このような歴史に残るであろう書『琉球漢詩の旅』を著わした上里賢一・茅原南龍両氏、さらにはこれを企画し出版した琉球新報社の慧眼に心洗われる思いである。漢詩と書に関心をよせる人はもとより、近世琉球の文人が近代を迎える激動の時代にどう立ち向かったか―に関心をもつすべての人に一読をすすめたい。

八月十五日よるホテルアトルで茅原書芸会宮古支局主催で出版祝賀会が催された。池田幸泉支局長あいさつのほか立津精一、佐渡山正吉、安里哲氏らが祝辞をのべ、上里・茅原両氏のミニ講話もおこなわれた。二一・五×二六・五、一三〇頁、二八五七円十税、二〇〇一・六・二三刊、琉球新報社。

〔宮古郷土史研究会会報〕一二六号、二〇〇一・九・十三

##### 6. 照屋 盛「兎のつぶやき」新聞投稿集 パート2」

昨二〇〇一年五月、「うさぎのつぶやき パート1」を出して、ほぼ一年ぶり表題どおりのパート2の発行である。「はしがき」で、「人は誰でも健康で長生きしたいと思っている」、しかし「現実には厳しい」ので思うようにはいかないであろうが、「心がけと工夫しだいで道は開ける」のだから、「感性を司る右脳、論理性を受け持った左脳の働きをバランスよく保存する」ために、「適度な運動、読むこと、そして書くことだ」との考えからの新聞投稿であり、この一年間のまとめが卯年生まれの著者の「兎のつぶやき」なのだという。巻頭は「池間中学校の思い出」で、巻末の「元のみどり豊かな島に「保良の神・人・自然」シンポに参加して」まで二十三編を収めている。ほぼ月二編の割りりで寄稿している。教育現場にまつわる総合学習や体験学習、故郷多良間村の伝統行事「スツウプナカ」「八月踊り」、方言の

ある生活、宮古諸島の地名考、自然保護、ロシアの日本研究家・ネフスキーゆかりのロシア訪問、那覇市の友好都市、福州訪問記など。きわめて多岐にわたっており、著者の好奇心旺盛な様はまるで若者のようである。

編集は発行順に収録しているのであるが、掲載紙並びに掲載年月日等のないのが惜しまれる。もともと著者にしてみれば「右脳、左脳を適度に刺激し、おおらかにしかも充実した一日、一年、一生にしたい」ための「読むこと、そして書くこと」の延長戦でのまとめということ、さほど気にしていないのであろう。「あとがき」では「書き残したものは、生きた証にもなる」、さらにパート3へ邁進したい、と記している。なお「はしがき」は、パート1と同一文である。A五判、八四頁、私家版。

(「宮古郷土史研究会会報」一三二号、二〇〇二・七・十一)

## 7. たいらてつ『空港』

『花・コスモス』『実況中継』につぐ著者三冊目の所産である。「島は環水性・隔絶性そして面積は相対的に狭小であるという自然条件にあり、島外との交通が大きく制約される。かつて交通手段は海上交通のみに頼っていた」(「あとがき」より)。宮古も例外ではない。かつて漲水港とよばれた現平良港は宮古外との唯一の「門戸であり結節点であった」が、一九七二(昭和四十七)年五月の本土復帰後さらに「機能は飛躍的に充実、人の往来、物流の拠点となり、情報・文化の玄関口」として発展した。しかし一九五〇年代半ばから民間航空機が就航するようになって次第に宮古空港が整備され、現在では航空機の利用が一般的で、「諸情報は空港から、物を媒介した情報文化は港から」と変わってきている。

そこで、観光立県を叫ぶ沖縄県(＝宮古)、観光客がくれば地域経済の活性化につながる。観光客と接触することで、「物の見方、考え方も徐々に変化し視野も広くなるのでは」と、空港で観光客にインタビューする。ところが観光客にしてみれば「はじめての土地で気もそぞろ」であり、見込みどおりの話が聞けるとは限らない、それではと「方針をかえ」て各面から調査し、まとめたのが本書になった、という次第である。

それでも巻頭をかざる「空港」では、さきの大戦で海軍飛行場として建設された宮古空港の沿革、各航空会社並びにターミナルの変遷、土産物店から、県内ばかりか、国内外の主要空港の概要に至るまで、詳細をきわめている。「観光客インタビュー」では、香川、東京、大分、埼玉、山形、福岡、大阪、兵庫等八都道府県におよんでいる。さらに「知的欲求を刺激する」ねらいで、「各地の今」を知ってもらおうと、「平良市の姉妹都市・他」で、津山市、世田谷区、室蘭市、「柳田国男ゆかり都市」の遠野市や我孫子市、飯田市など八市町村、「まち・それぞれ」で、岩手県宮古市、山口県萩市など八市町が取り上げられている。選択の基準は示されていないが、いずれも平良市ひいては宮古の現在と将来を考える上で話題性の高い、地域性豊かな市町村群といえそうである。A五判、一七〇頁、私家版、二〇〇二・一〇刊(前同)

(「宮古郷土史研究会会報」一三二号、二〇〇二・九・十二)

## 8. 新里 幸昭『宮古の歌謡』

一九六四年夏、琉大学生時代に始まった著者の四十年に及ぶ宮古歌謡の調査研究の集大成である。同時に古語の解明は、宮古の歴史研究にも大きく寄与することであろう。

「序にかえて」で、宮古歌謡の研究について四期に分けて総論的に提示、Ⅰ宮古の歌謡で、分野別歌謡を例示して具体的に考察している。

第一期は、一八九〇年代田島利三郎に始まって、伊波普猷、柳田國男、ネフスキーらによる宮古旧記類等の歌謡の収集・語註、通釈など。

第二期は、一九二〇年代宮古地元の慶世村恒任の歌謡の分類・体系化に始まって、稲村賢敷らの歌謡の史的展開、歌謡語の解釈を積極的にすすめた時期。

第三期は、一九六〇年代、外間守善と著者らによって宮古歌謡の聴き取り調査が本格化、その全体像が明らかにされて、『宮古島の神歌』（一九七二年）、『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』（一九七八年）が公刊された時期、それ以降現在までを第四期と区分している。折口信夫は「神のことばから文学が始まる」と説き、「文学発生を祭式の場合」に求めたが、南島歌謡の研究もそれに沿うものである。呪禱的歌謡から叙事的歌謡・抒情的歌謡への展開である。著者はこれまでの研究成果を踏まえつつも、呪詞・呪禱的歌謡二十六、叙事的歌謡十二、抒情的歌謡五、計四十一点を例示して、詳細に自説を論述している。

宮古史をはじめて体系化した『宮古史伝』（一九二七年）の著者慶世村恒任は「自序」で、「宮古を知って沖繩や八重山の何等かの解決はつくとも、沖繩や八重山を知るだけでは宮古の何物も解決されない」、宮古研究を敬遠するのは「多くの古語をそのままにとどめ居るであろう」宮古の「言語の不可解に因由し」、「アヤゴは触るるに能はざる歌謡とされ」ている、と指摘した。

本書は、一四〇〇余項を収録したⅡ宮古歌謡語辞典と合わせ、慶

世村の嘆きへの回答でもあり、文献資料の少ない宮古史研究にも貢献するであろう。今や宮古人並みに方言に通じた著者の労を多としたい。（『琉球新報』二〇〇三・六・八）

〈付記〉

新里幸昭『宮古の歌謡』は、一九六四年、著者が琉球大学に在学中、沖繩文化研究所（仲宗根政善所長）が設立された。その初の総合調査地が宮古となり、そのさい外間守善文学班研究調査員の助手として参加して以来、四十年近く宮古に通いつづけた成果である。

その間、外間教授との共著で、一九七二年『宮古島の神歌』（三一書房）、一九七八年『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』（角川書店）が世に問われたが、今回はそれらの成果のうえにさらに研究調査を深めた宮古歌謡に関する初の単独著書である。

狩俣はじめ、調査地ではつねにその土地にとけこんでの真摯な姿勢ゆえであろう、宮古方言を宮古人並みに語る著者の研究世界は、「序にかえて 宮古の歌謡く研究史とジャンルについて」でおよそうかがうことができる。明治期の田島利三郎・伊波普猷に始まる宮古歌謡（ピヤーンシ、タービ、フサ、ニール）、叙事的歌謡（アーク、クイチャー・アーク）、抒情的歌謡（トীগガニ、シュンカニ）と、発展過程に即して、慶世村恒任、稲村賢敷、ネフスキーらの研究にもふれつつ跡づけている。この叙述にそって具体的に論じた本論は、呪詞・呪禱的歌謡、叙事的歌謡、抒情的歌謡の三章構成である。呪詞・呪禱的歌謡は唱えもの七、ピヤーンシ三、タービ四、フサ七、ニール五、叙事的歌謡は、アーク（アヤグ）七、クイチャー・アーク五、抒情的歌謡は、トীগガニ・アーク四、シュンカニ、と四十三点取りあげ、「その解釈を通して、宮古の基礎文化、その精神世界を開示」（表紙帯）している。

附録「宮古歌謡語辞典」は、目次では、本論の第一部に対して、第二部となっている。一九七九年一月、著者がガリ版刷りで手がけた『宮古島旧記並史歌集解』（稲村賢敷、一九六二）の歌謡語索引と語彙を基にその後の研究成果をくわえたもので、およそ一四〇〇余項目。古謡にうたわれた語彙のなかにはもはや死語といっても過言ではない語も多い。その説明は、文献史料の少ない宮古の歴史研究にも貢献する貴重な成果といえよう。

なお著者は、二〇〇一年三月、高校教員退職後は県内各大学の非常勤講師を勤める傍ら研究活動をつづけている。A五判、三五八頁、三八〇〇円＋税、二〇〇三・四・二五刊、沖繩タイムス社。

〔宮古郷土史研究会会報〕一三七号、二〇〇三・七・一〇）

### 9. 伊良波盛男『鬼虎伝説く和那国を守った男』

「山之口猥賞」受賞詩人として知られる平良・池間島出身・千葉県在住の伊良波盛男氏が、このほど小説『鬼虎伝説く和那国を守った男』を出版した。十数年来の構想のようである。

鬼虎は、俗に「ヤーマ・ウントラ」（八重山の鬼虎）とよばれ、宮古では広く悪人のように語り伝えられている。狩俣あか田屋の生まれ。五、六歳のころ、宮古は大飢饉に襲われたため、和那国の商人に米一升（異説では粟ザル一杯）で買われた。長じて和那国の支配者となったが、首里王府に従わなかったために、王命で仲宗根豊見親の率いる宮古勢に討たれた、と伝えられている。

十八世紀初々中期の「雍正旧記」や仲宗根豊見親を元祖とする「忠導氏正統家譜」等にも記されている。もっとも記録も伝承も幼少時と最後を記すのみで、その間、どのように成長し、首長にまで昇りつめたのかを伝えていない。勝者の記録は残っても敗者の記録は残

らぬのが世の常である。著者はこれら勝者の記録から抹殺された世界に分け入り、「李朝実録」に記された朝鮮・済州島人の和那国島見聞録等も駆使して、鬼虎の生涯を描いている。

武勇・智謀ともに衆に衆にすぐれていたと記される反面、極悪非道の悪人のように伝えられてきた鬼虎を、恋もし、妻もめとり、子を愛し、労働もして、住民を慈しみ、悩むよき首長であったと、十章構成で、「稀有の純愛絵巻」（「帯」のことば）に仕立てている。鬼虎の輝かしい出生をめぐって、鬼虎と和那国商人、子守姉の慟哭、海の旅、鬼虎の思春期、雄々しく凜然として、和那国酋長鬼虎、宮古島頭首仲宗根豊見親の戦略、香菜の面影、和那国の乱、以上十章である。

宮古旧記類の伝える宮古勢の八重山攻めは一五〇〇年、オヤケアカハチらの事件のさいにも引きつづき和那国攻略を図ったが、要害堅固で空しく引き返したとも読める。和那国の伝承は、そのとき和那国の女性首長として采配を振るい、仲宗根豊見親の嫡子仲屋金盛の率いる宮古勢を撃退したのは、「サンアイ・イソバ」と伝えられている（池間栄三『和那国の歴史』。いわば鬼虎を討ち取るために攻め入ったのは和那国攻略の二回めということになる。子のいないサンアイ・イソバから鬼虎へどのようにして権力委譲がなされたか、興味の尽きないところである。

宮古勢によって討ち取られた鬼虎の屋敷には火が放たれた。燃えさかる炎の中から雄雌二羽のタカが青空高く舞あがり、北東の空の彼方へ飛んでいく。鬼虎と彼をいつくしみ育て、和那国に去ったのちも二十余年慕いつづけた守姉の魂であろうと暗示させながら……。著者には既に『蛇の踊り子』『カナシ伝』など、二十点近い著作がある。次回は今一步宮古（池間島）方言に踏み込んだ作品の誕生を

期待したいものである。(「宮古毎日新聞」二〇〇四・二・十三)

二〇〇五・七・一〇刊。

#### 10・徳嶺恵美子 句集『花梯梧』

徳嶺恵美子さんが教職を去って十五年、「喜寿」を記念して句集『花梯梧』を上梓された。

一九八八(昭和六十三)年定年退職後に真栄城いさを氏について俳句を学び、「琉球俳壇」に投句し始めた。いさを氏の主宰する「藍の会」に入り、さらにいさを氏とともに結社「鷹」をへて「岳」に所属しているという。句集は、時系列に、「うりずん」「祝女のこと」「光るロザリオ」「鷹柱」「春の道」の五編構成で、四百句近くおさめている。「岳」を主宰する宮坂静生氏は「序」を寄せて、「どの句にも宮古島の地の貌が、端的に、彫り深く刻まれていて感動する」「カトリック信者としての、…日常が、緊張らないで淡々と詠まれてい」て、「静かに心に沁み透るような句」であり、「端的であり、かつしなやか、そこにぬくもりが生まれる」「句集『花梯梧』には十五年のそのときどきのときめきが収められている」と評している。

また、始めて俳句の手ほどきをした真栄城いさを氏は、跋文「ハレルヤの余韻に」を寄せ、「敬虔な祈りの日々なかで、土地や、人や、花や、鳥たちの見せる地貌の光と影に感動する」作品を詠んでいると祝意を表している。次のような句がある。

鷹の群一樹一樹に吸ひこまれ

鷹柱惣然と綾線にあり

浜木綿や海の夜明けをひとり占め

砧うつ宮古上布や春深し

訪れる人なき御嶽大西日

A五判、一七七頁、岳俳句叢書一一三、岳書館(長野県松本市)、

#### 11・儀間比呂志 版画集『ツルとタケシ』

「沖繩戦」はじめ沖繩の歴史や文化に根ざした多数の版画集を世に送り出している大阪在住・画家の儀間比呂志氏が、宮古南静園とハンセン病を題材にした版画集『ツルとタケシ』を出版した。二十九冊めの作品だという。宮古南静園入園者らの証言集をもとに児童向け絵本として上梓したものである。

ツルとタケシは三つ違いの兄と妹。小学校入学を前にしてツルがハンセン病を発病、不治の病だとしてらい予防法で強制的に南静園に入れられた。ほどなく太平洋戦争は激化、園長はじめ職員は入園者を放置して安全地帯へ逃散する。残された入園者は治療はおろか、食料も衣料の補給もなく放置される。米英軍の爆撃で園舎は全焼、入園者は行くあてもなく海辺近くの洞穴暮らしを余儀なくされ、多くは飢えとマラリアで命を落としてしまう。兄のタケシは父を戦場に召集され、母を爆撃で奪われ、妹ツルまでも遂にはマラリアで命を失い、一人ぼっちにされる。それでも戦後新しい世の中が始まるとともにハンセン病の治療薬も導入されて入園者に希望の光がさし込み、ツルを可愛がった人たちとともに新しい一歩を踏みだしていく。

明治以来のライ予防法によって人としてのすべての権利を奪われたハンセン病患者をテーマにしながら、全編儀間氏独特の力強いタッチで愛情深く描かれている。年令、性別を越えてすべての読者に多くの共感をよぶことであろう。

帯には「幼い妹と少年のきょうだい愛を中心に」、「ハンセン病患者たちの国による『隔離と根絶』の悪法とのたたかい、明日を生き

る源として命の再生をみようとしたのが物語のテーマ」だと記されている。戦後の一時期、南静園園長でもある伊志嶺亮平市長（当時）が、「感謝と推薦」のことは寄せている。三九頁、一五〇〇円＋税、清風堂書店（大阪）、二〇〇五・九・一〇刊。

〔宮古郷土史研究会会報〕一五一号、二〇〇五・十一・二六

## 12・幸地ヨシ子 エッセイ集『喜怒哀楽』

一読して、いつか以前に十代で読み、二十代半ば東北の旅で偶然にも遭遇した、高山樗牛の「文は是に至りて畢境人なり命なり人生也」を想起していた。

全編を通して古希を迎えた著者の表題通り「喜怒哀楽」の人生そのものだが、お人柄であろうか、少しも気どつたところのない日常のことでたんたんとはつづられている。読み始めたら止まることなぐページをめくり、先へ先へと進んでいる…。

著者は還暦を迎えたころ、日ごろを知る娘たちからエッセイ集のまとめをすすめられたのに、その気になれなかつたようだ。その後、思いがけず緊急手術を受ける病いに伏つたのを契機に、見舞いにおとずれた皆さんへのお礼を込めて、ようやくまとめてみる気になつたという。

五十代から書き始め、地元紙などに発表したエッセイは五十余編にのぼるようだが、そのなかから二十四編を選び、七部構成でまとめている。一部―市民文化祭、二部―宮古毎日 無冠、三部―宮古毎日 ペン遊ペン楽、四部―宮古毎日 ゆみメール、五部―花 view 青春メッセージ、六部―その他、新聞投稿、七部―沖縄文学賞、というふうにつづけている。

―十数年前に逝つた母の夢をみた。予期せぬ夢は覚めないでほし

いという私の願いをこわして朝を迎えた。久しぶりに会つた母は、私が寢床を離れた後も再び姿見の中に現れた。何と、母そっくりになつた自分の姿がそこに映っていた（「母が伝えたかつたこと」）。

生年からみて母が著者を身籠もっているところに父は出征したのであろうか。「私が生まれてまもなく戦死したという父の存在は全く実感がなかつたが、ある日の新聞に父の写真が掲載された「五十三年目の対面」や、ハンセン病療養所の入園者との交流をまとめた「名もなく生きて」などきわめて感動的である、「青春メッセージ」では、よく耳にする「子どもしかるな 来た道や、年寄り笑うな 行く道や」と記している。至言であろう。

奥付けに、題字、イラストはすべて早くにエッセイ集の出版をすすめた娘たちの作品であることが明記されている。こんなところにも著者のお人柄―ふだんに姉妹のような母子の睦まじさが伝わってくるようだ。一〇七頁、私家版、編集・製作 花 view 出版、二〇一八・七・八刊

## 13・「沖縄詩歌集」琉球の風」―宮古関係者も十一人」

帯に「詩歌に宿る沖縄の魂」と記し、さらに「沖縄を愛する二〇四名による短歌、俳句、詩などを収録！」したことをつけている。古琉球く現代、「おもろさうし」から「琉球処分」「沖縄戦」、米軍基地七〇%から、辺野古までの世界が網羅され、宮古関係者も十一人、作品とともに収録されている。

序章に始まって、以下全体は十二章で構成されており、章ごとに冒頭一言付して全体像を伝えている。序章 七人、沖縄の歴史的詩篇―大いなるわななきぞ、一章 十九人、短歌・詩歌―碧のまぼろし、二章 四四人、俳句―世界報来い（おおしる建「孵る」、宮島

虎男「異形の島」、三章 十七人、詩—魂呼ばい（伊良波盛男「何もない島の話」、久貝清次「ひとつながりのいのち」、砂川哲雄「とうもろの幻想」、かわかみまさと「護岸工事・がんづうおばあ」、四章 十五人、詩—宮古諸島・八重山諸島（下地ヒロユキ「朝のさんぽ」。垣花恵子「人桝田」、トウシツグー、五章 十二人、詩—奄美諸島、六章 十八人、詩—ひめゆり学徒隊・ガマへの鎮魂、七章 十三人、詩—琉球・怒りの記憶（川満信一「慰安婦」、八章 十七人、詩—辺野古・人間の鎖、九章 十六人、詩—ヤンバルの森・高江と本土米軍基地（新城兵一「健忘症」、十章 十七人、詩—沖繩の友、沖繩文化への思い、十一章 十一人、大事なこと、いくさを知らぬ童たち（松原敏夫「島のブザ（おじさん）」）。

編者四人のうち三人—佐相憲一、鈴木光影、鈴木比佐雄らが「解説」を分担、執筆している。鈴木比佐雄の、「おもしろさうし」を生んだ琉球国の民衆や、琉球弧の島々の苦難に満ちた暮らしや誇り高い文化が想起され、今も神話が息づく沖繩魂まぶいを感受し多彩な手法で表現されている」は、「帯」にも紹介され、さらに「沖繩〈琉球〉への文化風土は」「困難さをいつも抱えながらも、どれほど多様性に満ちた豊穡なものを生み出したかを短歌、琉歌、俳句、詩を通して感受してもらいたい」と記している。

なお序章には、山之口獏の「会話」、一章には、折口信夫の「碧のまぼろし」、二章には、篠原鳳作の「珊瑚礁ソウゴウ」も、それぞれ略歴とともに紹介されている。三一九頁、一八〇〇円十税、コールサク社（東京）、二〇一八・六・二三刊。佐相氏は十一月六日未明NHKラジオで「沖繩詩歌集」刊行と詩人の歩み」と題して語ったもよう。

（「宮古郷土史研究会会報」二二九号、二〇一八・十一・十二）